

会津の歴史シリーズ



第1回 城の歴史と鶴ヶ城

中岡 進 (なかおかすすむ)

若松城天守閣郷土博物館
副館長・学芸員



今月号から1年間にわたって「会津の歴史シリーズ」を連載します。若松城天守閣郷土博物館の副館長の中岡進氏と、学芸員の湯田祥子氏にご担当いただきます。

「鶴ヶ城」。福島県に住む人であれば、多くの人がこの名前を聞いたことがあるだろう、県を代表する観光スポットである。この鶴ヶ城の学芸スタッフが、一年間執筆させていただくことになったので、まずはわれわれの職場である鶴ヶ城のことから書いてみたい。

◆「城」とは何か

そもそも「お城」とは何か。全国的には世界遺産にもなった姫路城（兵庫県）や松本城（長野県）などの国宝天守、松山城（愛媛県）や弘前城（青森県）といった重要文化財の天守、さらに大阪城や名古屋城など再建された天守が有名である。福島県内でも鶴ヶ城以外に二本松城や白河の小峰城など、多くの人が訪れる観光地として知られている城があり、それぞれの場所のランドマーク的な役割を果たしている。こうしたことから、現代社会においては「城」＝天守などの建物と解釈されることが多いようだ。しかし、江戸時代までは違って、石垣や堀などで周囲を囲み、外部か

ら中へは容易に進入できないような造りになった区域の全体を城と呼んでいた。これが本来の城の姿なのである。外部からの進入を許さないというのは、言うまでもなく戦争を意識したもので、戦いの拠点となるべきところを表わしている。現代の観光のシンボルのような役割からはかけ離れているものではあるが、城にはそうした歴史が刻まれているのである。城の中でもひととき高くそびえる天守は、もともとは敵の進撃をいち早く察知するための物見やぐらのために用いられていたものだ。しかし実際に城を巡る戦いを経験したところは、あまり多くない。

まず一般的な城の歴史について簡単に触れておこう。城という概念がいつごろから生まれてきたのかは、はっきりしない。近隣の豪族との争いの中で、攻め込まれてきても大丈夫なように、周囲に土を盛り上げるなどして障害物を築いたことが始まりだろう。土を盛るために掘ったところに水がたまると、それが二重の障害となるということも掘が築かれるようになった。さらに土を盛り上

げただけだと表面が崩れやすく、またより高く築くために石垣が積まれるようになった。周囲の防御線の構築は、このように進歩した。一方で、一番中心的な人物がいる場所は「館」といった単なる建物に過ぎなかったが、戦いの集団の規模が大きくなり、より敵の攻撃に対する安全を確保するためにはということ、その拠点を高い場所へ求めるようになっていった。室町時代から戦国期にかけての城の多くは、こうした山城の形態となっている。

こうした中で登場したのが、天下統一を目指した武将の織田信長で、彼が拠点とした安土城（滋賀県）に初めて本格的で大規模な天守を建設した。1576年のことである。あえて「大規模な」としたのは、それ以前にも天守に似たような建造物はあったようなのだが、その詳細がはっきりしないためである。おそらくは櫓を少々立派にしたようなものだと思う。この安土城も小高い山の頂上に建てられた。まだ戦国時代を意識したものである（現代の分類では、周囲との高低差が100メートル以下なので平山城となっている）。

これが次代の豊臣秀吉になると、すでに天下を統一し、いくさへの備えよりも城下町の中心的な存在へと変わっていき、聚楽第（京都府）や大坂

城など、平地の、すでに都市となっているまん中に築城するようになったのである。以後、江戸時代になると徳川幕府は城の新築はもちろん修繕さえも容易に認めなかった。これは、幕府に抵抗しようとする武力を備えることを未然に防ぐ目的もあってのことで、世の中も争いのない泰平の時代が200年以上も長く続いた。

そして1868年に起きたのが戊辰戦争である。日本史では久々の本格的な戦闘であるが、使用される武器はというと、幕府が長く続いた鎖国を解いたことで、外国から進んだ銃器が大量に流入してきた。一方でその拠点となる城は、戦国時代とあまり変わらないものであった。城を巡る攻防においては、周囲に設けられた縄張の障害物を軽々と飛び越える砲撃によって、落城する城が相次いだ。長岡（新潟県）や宇都宮（栃木県）、白河、平、二本松などである。そして会津の鶴ヶ城へ戦いの場は移った。

◆鶴ヶ城を見る

ここで会津の鶴ヶ城の縄張について説明しておこう。現在鶴ヶ城公園として残されている約26万平方メートルの広大な敷地は、もともとの城としての鶴ヶ城の一部に過ぎない、内堀の内側だけで



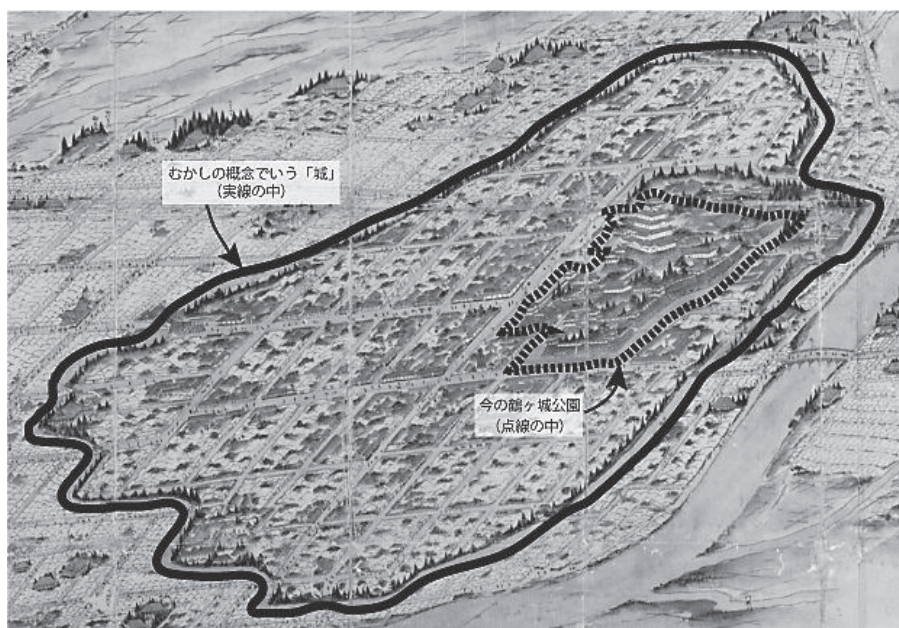
鶴ヶ城

2011年に屋根瓦が葺き替えられ、現在見ることができる唯一の赤瓦天守である。

ある。江戸時代の城はというと、北はおよそ1キロメートル離れた、現在の東邦銀行会津支店の近くに外堀が築かれていて、そこまでがすべて城だったのである。広さにすれば現在の城跡の7～8倍にもなるものだった。もっとも、当時の城としては特に驚くべきものでもない。会津23万石の城主の居城としてふさわしい大きさである。防衛のための構造物も、堀は弓矢が届かない程度の50メートルぐらいの幅で、周囲との高低差も20メートルに満たない平山城である。ここを拠点に会津藩は必死の抵抗を続けた。1ヶ月も籠城戦を続け、「難攻不落の名城」と知られるようになったのである。敵側に見れば、それまで難なく攻略してきた強力な武器を携えているのに、簡単に勝利を収めることができなかつたので、「難攻不落」という表現を用いたのだろうが、前述したように城としては戦国時代の攻撃に対する備えしかしていない。それでも長く抵抗することができた要因は、内部にたてこもる人間によるところが大きいと考える。自分たちの土地を守ろうという会津の人たちだけでなく、旧幕府軍の拠点として各地から兵が集結してきたのだから、ほかの落城した城

と比較するのは適切ではないのだ。

戊辰戦争に関しては、別に述べる機会を設けさせていただく予定であるので、その後の鶴ヶ城へと話を移そう。会津藩は戊辰戦争の結果を受けて、領地を没収されてしまう。翌年、新たに斗南（現在の青森県東部）で藩を再興することが認められ、藩士たちは移り住むことになった。結果として若松の町は、外堀に囲まれたいわゆる「城」の中にいた人たちは、全員立退くこととなり、誰もいない事態となったのである。もともと全国各地の政治・経済の中心として城があり、その周囲に城下町が展開されて人口も集中していた。それが明治となって、町も近代化することになって、自然と城下町が地域の中心都市として役割を担うこととなった。だが近代化が進むにつれ、中心地に居座る城郭は次第に邪魔扱いをされ、城の取り壊しが進んだのである。しかしながら若松は、城下町の中核をなしていたところには誰も住まない状況になり、結果的に町の近代化には城跡は邪魔にならなかつたのでそのまま残されることとなったのだった。



幕末期の若松城の城としての総構え（「若松城下絵図」より）
若松は、江戸時代には東日本でも有数の大都市だった。